

愛する長崎の同志に贈る

平和の鐘 虹光る長崎 / 池田大作

つばきは光の国の夢から生まれた
新生の鼓動を伝える羽ばたきは
静かに たおやかに
平和の琴をつまびき
いのちの闇夜を貫く
銀の矢となる
やがて
黄金の光を放つ旅を始めたのだ
青春の翼に
恐れる雲はない

長崎——

船行きかう港をいだき
まさに飛び立たんとする
鶴の姿したる山なみ
その稲佐の山の麓
爆心の地にほど近き川のほとり
白亜の平和会館は
壮麗なるたたずまいを現した

ああ 不思議なる因縁なるか
かつて 原子の熱線に焼かれ
水を求めた
幾多の無告の命を呑み 流した
この浦上川に影を映して
いま 恒久平和への殿堂は建つ

ここに

友の祈りは満ち
新たなる不戦の誓いは蘇り
人間讃歌の調べ流れて

平和の鐘は
高らかに鳴りわたる

おお 長崎！
海碧く 緑萌え 花薫り
石坂に洋館の薨は並び
真珠の雨降れば
石畳 銀に染まり
日暮れば
宝石の夜景きらめく

おお 長崎！

ロマン漂う詩情の街よ
文化の窓を世界に開き
青春のあこがれをつつむ
進取の街よ
そして キリシタン殉難の
哀切の涙とどめる
歴史の街よ

思えば四十余年前
この美しき街に
運命の一撃を与えたのは
皮肉にも 悲運にも
厚き叢雲であった

一九四五年八月九日——

九州・小倉を目指す原爆搭載機あり
上空に至るも
雲に阻まれ 目標の視認ならず
機首を返して長崎に向かう

この街もまた雲につつまれ
視界はきかず
ああ されど
サタンの誘いか
にわかには雲に裂け目生じて
眼下に兵器工場の姿現る

午前十一時二分
広島に次ぐ
二度目の原爆は投下された
紅蓮の火球の炸裂
火炎は天地を押し
熱線は鉄をも溶かし
爆風は石をも砕き
ビルは崩れ 木々は燃え
瞬時にして
街は灰塵の荒野と化した

死せる人の数・七万四千
負傷せる人の数・七万五千
阿鼻の叫喚はこの世に現じた
死臭が漂う黒き瓦礫の街を
愛するわが子を捜してさまよう母
水を求めて地を這う人……
ああ 路上の骸もいたましく
茶毘の炎は
いつまでも夜空を焦がした

爆心の地より
日ごと、死の同心円は広がり
生ある人も
痛苦にうめき
明日をも知れぬ命におののく
体を侵す放射能

苦しみの重荷を背負い
光なき苦悩の小路をさすらい歩く
天を仰いで恨みをのみ
地に伏して号泣するも
傷痕は消えず 心また癒えず

原爆投下の日より十二年を経た
昭和三十二年九月八日——
核実験の脅威の濃霧覆うあの日
恒久平和の熱願をいदैて
わが人生の師・戸田先生は叫んだ
核の奥に隠された「爪」をば
もぎ取らんと
人間の「生存の権利」を脅かす
原爆を用いるものは
いかなる国であれ

「サタン」「魔もの」なりと
そして
その言をば「遺訓の第一」とし
この思想を
全世界に広めゆくことを
若き青年たちに託した
これこそが
われらの平和運動の原点だ
原爆の奥に隠された「爪」とは何か——
核の使用の背後に交錯する
繁雑なる歴史の経緯
しかし
大義名分の表皮を剥げば
利害と権力の増大を企てる
国家の驕慢な

皮膚が顔を覗かせる

その無限の繰り返し
無限の徒労

さらに

その深層をたどれば
指導者を蝕む

心の核分裂と放射能汚染に
気付かず

いな 人間に巣くう

いな 気付こうとせず

生命の魔性に突き当たる

「現実」という名の

出口なき迷路のあちらへ こちらへ

右往左往している姿は

「エゴ」と「傲り」

「憎悪」と「憤怒」

シシユフォスとどこか似ている

「猜疑」と「不安」

あたかも

それでは 平和は

地底にたぎるマグマのごとく

どこまでいっても

胸中にうねる暗き衝動の濁流

次の戦争へのモラトリアム

戦争と戦争の

幕間劇でしかないのだ

それは 理知をも呑みほし

増殖し 肥大しつつ

分断へ 破壊へ 死滅へと

駆り立て 巻き込む

ゲートはいった

巨大な魔力の根源だ

「きみたち自身のなかを捜したまえ

そうすれば

すべてを見出すであろう」と

それは 原子核の分裂にもまして

恐ろしく そして手強い

心の核分裂——

そうなのだ

放射能の汚染よりも

嵐に揺るがぬ大樹のごとき

恐ろしく そして手強い

確かなる心を求めての

心の放射能汚染——

内面への冒険

見えない世界の出来事ゆえに

内面への開拓作業 掘削作業

誰もが目をもくもらせる

これこそ

人間最大の弱点 盲点……

「核の脅威」の試練に立つ現代文明が

もつとも忘れ来った

平和への画竜点睛なのだ

ホメロスの語った

かのシシユフォスの労働

だからこそ

——大石を山の頂まで

なればこそ恩師は

辛苦して運び上げて

事態の本質に鋭く迫り

一歩手前で 転がり落つ

生命の魔性の爪をもぎ取らんと
嚴として
宣言の矢を放ったのだ

雄々しく 凜々しく
敢然と運命に立ち向かうのだ

「人間」こそ平和の座標軸——
ゆえに

荒れ狂う迫害の嵐のなか

一個の人間における
一念の転換は

大聖哲は
大慈大悲をもって仰せられた
「日蓮悦んで云く
本より存知の旨なり」と

偉大なる人間革命は
一国のいな 世界の
万代にわたる和平創出の回転軸なのだ

生命の大法たる仏法に

ああ 長崎の友よ
大いなる正義と勇氣の心のままに
凜然と立ち上がり
凱歌の烈日を仰ぎゆくのだ

その無限の光源あり
人間復権の方途を示し
民衆の不壊なる
幸福の道を開き

「尊嚴」と「自由」と「平等」の
実現の証を打ち立てる

恩師逝去の年 菊花の十一月
私は 師の心を わが心として
この大地に平和の火をともしさんと
初の支部結成式に臨んだ
そして

なれば
生存の権利を脅かす核を廃絶し
平和を創造しゆくことは
また 人間の尊嚴を守り抜くことは
仏法者たるわれらの
必然の帰結であり
果たさねばならぬ
尊い責務なのだ

長崎の天地に湧き出でた
一万余の友の前途を祝しつつ
万感の思いをこめて
私は語った——
黒き被爆の大地に平和の真の楽土を！
もつとも不幸に泣いた人こそ
もつとも幸福になりゆく権利がある
被爆の苦汁をなめた長崎の友は
平和の尊さを誰よりも知る

ああ 長崎の運命を変えた
黒き宿命の叢雲——
なれど なれど
あなたたちよ
「苦難を通じて歓喜にいたれ」
と叫んだ
かの楽聖ベートーベンのごとく

それゆえに
あなたたちには
この街を この天地を
どこよりも平和な
どこよりも幸せな
国土と変えゆく使命があるのだ

平和は

決して与えられるものではない

自らの意志で

自らの手で

額に汗し 語り 動き

岩盤をこぶしで砕くが思いで

戦い 勝ち取るものだ

原爆のあの惨禍は

過ぎ去っていく歴史の傷痕ではない

犠牲となった万余の同胞の沈黙の叫びは

万代への慟哭の教訓である

また ただ平和へ

ただ平和への 悠久の叫びに

転じゆかねばならない

ああ 長崎の友よ

私は忘れまい

あの日の

あなたたちの誓いの笑顔を

私も誓った

「ナガサキのこころ」をいदैて

平和の使者として

世界を駆けようと

以来 三十星霜――

私は走った

世界の国々を巡っては

心と心の橋を架け

友誼と信頼の道を開き

文化の交流の水路をつくるために

あなたたちも立った

悲しみの大地に

新たなる不戦のうねりを起こし

永劫の常楽の都を築かんと

決然と立った

その渾身からの叫びは

熱い生命の鼓動は

一つ また一つと

波動を起こし

共感の輪を広げていった

ああ 友よ

長崎の友よ

わが心の平和図には

常に長崎があり

あなたたちの雄姿をば

思いえがいて

私は 平和旅を続けた

昭和五十五年陽光輝く春四月――

第五次訪中を終えた私は

空路 長崎へと向かった

日中の歴史に金剛の意義を刻み

友誼の金の橋を渡り帰った第一歩を

平和の故郷に印したかったからだ

あの日 空港で

「ようこそ」と迎えてくれた大村の友

ああ その天空に

まばゆい七彩の虹があった

それは

大いなる人類の理想を担いて進む

われらへの

祝福の絵巻なるか

旅立ちの錦なるかと思えた

そして二年後

時まさに

イギリスとアルゼンチンが

戦火を交える

フオークランド紛争の渦中

私は青葉の平和公園に立った

わがSGーのイギリスのリーダー

リチャード・コーストン理事長とともに

樹々はさわやかな風をそよぎ

白き鳩はたわむれ

彼方に噴水の飛沫のきらめくなか

平和祈念像を仰いだ

原爆の脅威を示す

上方をさした右手

平らけく 安らけくと

平和をすすめる

水平に伸ばした左手

柔和をたたえた

慈愛のかんばせ

この人類の悲願の像の前で

われらは

原爆犠牲者の冥福を祈り

永遠の平和への

深き誓願を込めて献花

そして

フオークランドの

戦いの終結を念じた

この争いのさなかに

両国をつなぐ友情の命脈あり

コーストン氏は

アルゼンチンの法友と

国際電話にて語らい約した

—— 国と国とは争い合うも

われらは

平和のために力尽くさんと

ああ われらの民衆と民衆の絆は
地下茎のごとく

国と国との溝を越えて

堅く 強く 結び合った

この根を

さらに深く さらに広く

無数に交差させ

地球を覆うのだ

その時 盤石なる不戦の礎は築かれる

平和の祈念像——

折り曲げた右足は

瞑想を 即ち「静」である

立てる左足は

救済を 即ち「動」を表す

平和への深き祈り 強き誓い

そして 果敢にして勇氣ある行動

われらが根本方軌たる自行化他

この歩みの彼方

“ 広布即平和 ” の大道の彼方

恒久平和の曙光は

赫々として昇る

しかし

その道程は遠く またはるかだ

けれど負けまい

祈念像の作者北村西望氏は詠んだ

「たゆまざる 歩みおそろし

かたつむり」

持続は力だ

蓄積は力だ

一つ一つの行動の積み重ねは

着実にして 間断なき
信念の歩みは
必ずや 壮大な理想の虹を
人類の頭上に懸けゆこう
一波が万波を呼ぶように
波浪が巖を削るがごとくに

ああ 友よ

わが愛する長崎の友よ

あの坂を この坂を

ひたすら友のために歩む

緑の丘の上の 晴れわたる空を信じて

青き島を 緑の島を

尊き法のために 駆ける

水平線の彼方 大光の輝くをみつめて

嵐吹く夜も 笑顔と笑顔で

人生と不退の坂を上り来た

君たちの あなたたちの

健気な ひたむきな姿に

人間王者の 桂冠は燦たり

ああ 友よ

わが愛する 平和の友よ

大村湾に沈む紅の夕日に

頬を染め

未来に思いを馳せつつ

諫早の文化会館にて

語り合った日々が

今も 私の胸に焼き付いている

あなたたちとともに

散策しつつ 推敲を重ね

つくりし 県歌「平和の鐘」

青年たちが
凜々しき決意を託し
熱唱してくれた 火の国「青葉の誓い」

それは

人間賛歌の時代の幕を開かんとする

若人の

みずみずしい生命のシンフォニーだ

さあ 旅立とう

長崎の友よ

不戦のたいまつを手に

慈愛のこころをいだいて

虹光る世紀の海へ

ピース・フロム・ナガサキ

長崎こそ

永劫の平和の故郷だ

生命の光彩輝く

歓喜のスクラムを組みつつ

この街に あの丘に

世界の空に

高らかに また 高らかに

平和の鐘を打ち鳴らすのだ

昭和六十三年十月二日

学会本部平和会館にて

世界平和の日にちなんで

桂冠詩人